
蒼の狼【タイトル未定】

瑠亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼の狼【タイトル未定】

【Nコード】

N3323W

【作者名】

瑠亜

【あらすじ】

研究所を逃げ出した少年、アル。

命からがら逃げ続けた途中、力尽きた所を、翔に拾われる。

しかし、それが日本全国を巻き込む大事件になるとは、まだ誰も知らなかった。

ファンタジー物語・第一作品をここに。

更新遅めかも知れません。小説の1ページは、通常の小説（原稿用紙200文字で、以前とは違い、行は開けていません。掲載時は開けます）約30ページ分になります。プロローグは含みませ

ん。

一章毎にまとめて書いているので、読みにくいかもしれませんが、
ご了承下さい。

2011/12/08 プロローグ修正。

#0 逃走（前書き）

話の大部分を修正しました。

#0 逃走

「はあっ、はあっ……はあッ！」

10月の中旬。

空全体を埋め尽くす広大な雲。今にも雨が降ってきそうな雰囲気だが、まだ雨は降っていない。

囁くように吹く風。それに揺られる草地。そして遠くにそびえ立つ赤い山々は、霧に身を隠していた。

季節が秋に移り変わった今だからこそ見える光景。しかし、それを見ていた者は誰も居ない。

唯、一人の少年を除いて。

「はあーっはあーっ……げほっ」

草達の間から、背の小さい少年が、凄まじい速さで飛び出してきた。少年は白い白衣に、グレーのスボン。髪は黄色で、髪は少しぼさぼさ気味だ。

そして、彼にはヒトには存在しないはずのものがある。

黄色い体毛、直立耳、黒い鼻、そして長い尻尾。

更に手には鋭い爪。

彼はまるで、ヒトと猫を混ぜたような、奇妙な姿をしていた。
ヒトと獣双方の姿を合わせ持つ生体。それは、空想上にしか存在し
ないはずの、【獣人】である。

その獣人という生き物に、彼は酷似していた。

「はあッはあッ……」

獣人の少年　アルは、荒い呼吸を繰り返しながら、足を動かす。
初めは幻想的だ、と見ていたあの景色も、今は見る暇もない。体力
が既に限界を超えていたのだ。

先程から全く変わらない景色。それを見て、アルは眉を顰める。

今まで一時間以上全力で走り続けていた筈なのに、景色は全く変わ
らない。

アルは、この景色に飽きてしまっていた。走り続けている理由とは
全く関与していないのだが、なんとなく今の現状から目を背けたか
った。

気を紛らわすために見ていた景色も、変わらなければ見る気も失せ
てしまう。

とりあえず、今は少し休むべきだ。アルは近くにあった岩に身を委
ね、どっと息を吐く。

寒さのせいか、息が白く濁る。それがどこか煩わしい気がして、アルは手で軽く掃った。

肉体的にも、精神的にも限界だったアルの視界は、次第に狭くなる。

しかし、アルは抵抗しなかった。否、正確には抵抗できなかった。

激しい眠気がアルを包み込み、アルの意識が奪われていく。

「もう、体力が限界だ。少し……寝ておこうかな」

そう呟くと、アルは小さく寝息を立て始めた。

彼の白い息が宙を舞い、やがて消える。

それはまるで、彼の打ち砕かれた希望のようだった。

沢山抱えて家を飛び出し、やがて打ち砕かれたアルの希望。

ほんの少し前までは、希望に満ちていたというのに。

アルは、無意識の内に涙を流していた。

窓の外は、青空が広がっていた。

雲は多少あるものの、ほぼ快晴と言えるこの景色が、アルの心を癒

す。

どこまでも続く草原、赤く輝く紅葉の山。アルは、全体が灰色で塗装された巨大な研究所の窓から身を乗り出し、秋の風景を眺めていた。

ふと、傍に鳥が留まった。小さな羽を閉じると、ちゅん、と小さく鳴く。

その姿がなんとも可愛らしく、アルはつい視線を景色から逸らす。

そしてまじまじと鳥を見つめていると、アルに気づいたのか、鳥がアルの方に首を動かした。

鳥は、逃げもせずじっとアルを見据えている。

そんな鳥を見て、アルはなんとなく指を出してみた。

よく、テレビとかで人の手に鳥が留まる映像を見かける。珍しく人を怖がらない鳥を見て、アルはついやりたくなってしまったのだ。

鳥は、差し出されたアルの指を見つめる。

ちゅん、と一声上げると、鳥はアルの指に向かって歩いていく。

ちよこちよことおぼつかない足取りが、アルの目を引き付ける。

「可愛いなあ……」

鳥と戯れることに夢中になっているアルは、遠くから聞こえてきた、バタン……という音に気づかなかった。

不意に強く吹いてきた風で、木々が揺れる。鳥が、何かに気づいたかのように、アルの指の一步手前で立ち止まった。

鳥は静止したまま動かない。何事だろう、とアルは部屋の扉へと視線を移す。

しかし、アルの耳には少しの音も入ってこない。

気のせいか、とアルは窓に向き合つと、そこには既に鳥は居なかった。

「あゝあ、逃げちゃったか」

アルは、軽く溜息をつきながら、窓を閉めようと、窓に手を掛ける。

すると、誰かが走ってくるような、激しい足音がアルの耳に届いた。アルは思わず飛び上がり、誰だろう、と扉に近づく。そして、耳を扉に密着させると、足音を聞こうと試みた。

心臓の鼓動が、少しずつ速くなってくる。額から汗が流れ、床に滴り落ちる。

足音は、とてつもない速さでアルの居る部屋に近づいてきている。もしこの部屋に用があるのなら、ここに居たら危ないだろう。アルは、扉が開いても当たらない所まで下がった。

靴がカツ、と乾いた音を鳴らし、アルは無意識の内に、足を滑らせるように動かす。

なんとなく、音を鳴らしてはいけない気がした。

「403号室『アル・マクシーミ』様、本部よりご命令です。ご同行願います」

予感の中、扉が激しく開け放たれたと思うと、背の高い、黒いコートを纏った怪しげな男が、押し入るように部屋に入ってきた。

ぼさぼさの黒髪に、細い目。そして全身黒づくめの独特の格好。アルは、男が何者かを悟った。

「あなたは、警備隊の、『瞬景』ですね？」

警備隊、それはこの研究所を守る、文字通り警備員。

中でも『瞬景』は、恐ろしい程の速さを主としており、暗殺などの

依頼も受け付けている。

研究所は、資料の宝庫。それを盗もうと企む者も多く、ここにも一月で三回も被害を受けた。

だが、盗人達は皆、その瞬景の手に掛かり、全員が絶命、資料は戻ってきた。

瞬景にとって、任務遂行のためならば、人の命も関係ないのだ。

「一体何の命令で？ 具体的に話せますか？」

「申し訳ないのですが……話せません」

刹那、男はアルの目の前に居た。移動する時の動作も、移動している姿も、何も見えなかった。動体視力には自信のあったアルは、啞然としてその場につっ立っていた。

「では失礼して」

男は、懐から手錠を取り出す。辛うじてこの動作は視認出来た。し

かし、腕が反応できない。

相手のほうが、動きが圧倒的に速かったのだ。

そして、手錠はアルの右手に掛けられ　とその時。

「ちょっと失礼しますよ、瞬景さん」

ごっん、と鈍い音がし、今にも手錠を掛けようとしていた男は倒れた。

アルがぼかんと口を開けていると、倒れた男の後ろから、アルと同じ白衣を着た男が現れた。

長い赤髪、整った顔立ち、そして瞬景の男をも越える背丈。

「クレリックさん……!!」

「ん？ ああ………」

クレリックと呼ばれる男は、瞬景の男を踏み越えて堂々と右手の親指を立てる。

「おーっす、アル君。大丈夫だったか？」

普段どおりの行動に、ほっとする反面、アルは気まずそうな顔をした。

それも当然、研究所では高い位を持つ瞬景を、殴り倒してしまったのだから。

「あの、大丈夫なんですか？ この人殴っちゃって……」

アルがおどおどと聞くと、クレリックは当たり前のように答える。

「勿論。まあ、それなりの理由があるんだけどな……とりあえず、座ろうか」

クレリックは、そう言うなり瞬景の男を抱え、部屋の中央に向かった。

沢山並ぶ棚の奥にある机の中を漁ると、長いロープを取り出し、男に巻きつける。

黒いコートがどんどんロープで埋め尽くされていき、遂に男は全身ロープでぐるぐる巻きにされてしまった。

流石にやりすぎだ、とアルは思ったが、クレリックは全く気にせず、椅子に腰掛けた。

「じゃ、君は反対側に座ってくれ。手短かに話す」

クレリックは、ポットに手を伸ばしながら言った。

アルは言われたとおりにすると、クレリックはポットの中身をコップに注ぐ。

黒い液体が湯気を出しながら、コップに入っていく。おそらく、コーヒーだろう、とアルは思った。

「君は確かブラックが好きなんだよな。じゃ、これで大丈夫か」

ある程度コーヒーを淹れると、クレリックはコップをアルに手渡す。

途端に、温かい熱が手に伝わり、アルは思わず強く握ってしまった。彼は寒がりなのだ。

「じゃ、飲みながら聞いてくれ」

クレリックが、かなり真剣そうな顔をして言った。クレリックが先程とは正反対の顔をしたので、

アルは少々戸惑いながら頷いた。

「時間が無いから率直に言うが、ここでは、ある実験が行われている。信じられないかもしれないが……」
その対象は、この研究員達だ」

体中に電流が流れたように、アルの体が跳ねた。

テーブルに足をぶつけて、危うくコーヒーを溢しそうになる。

彼の話が本当だとすると、先程、自分は実験体になる一歩手前だったのか。

あの時彼が来てくれなければ、自分はどうなっていたのだろう、とアルは思った。

「隣の部屋の奴が連れて行かれたのを、こっそり後ろで見ていたんだ。間違いない。」
奴らは、研究員達『人間』で、『獣人』という、ヒトと獣の能力を混ぜた生き物を造るうとしている」

また、テーブルがガタンと動いた。コップの中のコーヒーが、先程よりも激しく揺れる。

そして遂に、コーヒーが少量コップから溢れ、テーブルを濡らしてしまった。

しかし、アルはそれさえ気にも留めていない。クレリックをじっと見据えるアルの目は、恐怖に染まっていた。

クレリックは、そんなアルの様子に気づき、少し間を置いてから口を開いた。

「何故かは分からない。ただ、この実験の元凶は把握した。……恐らく、ここのボスだ」

ボス それは、ここの研究所の創設者で、現在、所長の役目を果たしている。

しかし、顔も年齢、性別さえも不明で、謎に包まれた人物で、この研究員誰一人として、ボスに会った事がないのだ。

色々と謎めいた人物だが、何故、自分の部下を巻き込むような事をしているのだろう。アルは複雑な表情をした。

「瞬景の奴ら、色々と知ってるみたいだな。今まで話した情報、全部そいつらから盗み聞きしたのさ。俺も驚いたよ。まさか会話の中に「ボス」って言葉が出たときにはね」

クレリックは両手を上げて、参ったね、と言った。

アルは、ポケットの中に手を突っ込み、何かを探すように手を動かす。

「警備員の目もすり抜けて逃げる……今の僕達には、選択肢はそれしか残されていない」

ポケットの中を探りながら、アルが言った。

ふと、手が細長いものに触れた。これだ、とアルはそれをポケットから取り出す。

「これ使って、逃げます?」

アルは、細長い二本のピンを、クレリックに見せた。中には蒼色と、黄色の二種類の液体がたっぷりと入っている。

「これは……なんだ?」

クレリックは、眉を顰めながら、液体を見つめる。

「いざという時のために作っておきました。特殊な魔法を混合して作った、『獣化薬』です。

これを飲めば、身体能力、寿命が飛躍的に伸びます。姿も、ヒトと

獣を混ぜた……まあ、一言で言えば、『獣人』ですね」

まるで雷に打たれたかのように、クレリックの顔が硬直した。

それも当然だった。アルの言った言葉……それは、ボスのしている事と殆ど変わらない事をする、という事を意味しているのだ。

逃げるためとはいえ、そんな簡単には承諾できないのだろう。クレリックは、しばらく口を閉じていた。

すると、不意にアルは部屋の隅へ行き、沢山のビンが立ち並ぶ棚から、一本のビンを取る。

透明な液体の入ったそれを大事そうに両手で持つと、胸ポケットの中に優しく入れた。

「これはまだ完成していません。逃げなきゃ、これは永遠に完成しない。……せっかくここまで作ってきたのに、勿体無いでしょう？」

アルの作った物　それは、あらゆる病気に対応した、特殊な薬である。

ここで作られている薬は、様々な種類の『魔術』を使用している。

……ヒトには皆魔力があり、それを上手く使うことによって、魔術を使うことができる。

世の中の人々が皆、『魔法など存在しない』と言っているのは、魔力を使う術を見つけていないからであって、魔力を持たないという事はありません。

しかし、これは研究所の間でつい最近知ったことであり、世の中にはまだこの情報は出回っていない。

魔術といえば、例えば何も無いところから火を出したり、電気を発生させたり、難易度は高いが、雪も降らせる事などが出来る。

……そして、アルの作った薬も、自身の魔力をつぎ込んで生み出した物だ。

あらゆる病気にかかった人々を救うために、長い年月を掛けて作り続けてきた、大切な薬。

そんな貴重な薬を、今手放すわけにはいかないのだ。

「もう時間が無いんですね。……行きましょう?」

アルは、半ば強制的に、クレリックの腕を引っ張る。

「あ、いや……俺は、体力あるし、君だけで良いと思うよ」

少々癪に障ってしまったのか、アルは残念そうに『そう……』と小さく言って、蒼い液体の入っているビンをポケットにしまう。

そして、窓のすぐ下にある壁まで歩いていき、ゆっくりとしゃがみこんだ。

「このダストシュートから行きましょうか」

アルは、クレリックの方を見ながら言った。

すると、突然ドーンという爆音が部屋に響いた。

クレリックが呻き声を上げながら倒れ、そのまま動かなくなる。

よく見ると、指先がほんの少し痙攣していた。必死に動こうとしているのだ。

「麻痺魔法か！」

アルは、思わず舌打ちをした。

全身を動けなくさせる麻痺魔法。見るからに、初心者向けのレベルの魔法だが、それでも十分危険だ。

普段なら、使用は出来ないよう、規制を掛けられている筈。それなのにここに飛んできたという事は　アルは開きっぱなしの扉を睨む。

アルは、素早くピンを口につけ、中の黄色い液体を口に流し込んだ。

「……………ウヴァアッ！」

アルは、やや悲鳴に近いような声を上げる。

身体が焼けてしまうのではないかと思うほどの熱が全身を駆け巡り、アルは目をぎゅっと瞑る。

すると、突然彼の身体が黄色く発光し、やがて光が部屋全体を埋め尽くした。

あまりにも衝撃的な光景。身体は動かせずとも、目は見えていたクレリックは、その光景に目を疑う。

数十秒ほど経つと、発光が少しずつ収まり始めた。光の中に隠れていたアルのシルエットが、ゆっくりと姿を現す。

「！」

クレリックは、驚きのあまり声を上げそうになった。正確には声は出せなかったのだが。

彼の見る先には、先程のアルはいなかった。

全身黄色の毛で覆われ、黄色の耳を生やし、黒く染まった鼻。

そして、獣独特の、黄色く、鋭い爪。

ヒトと猫の姿を併せ持ち、白衣を纏った『獣人』のアル。

閉じていた彼の瞼が開く。そこからは、細く切れ長の瞳孔を持った黄色い目が覗いていた。

「ふう……」

アルは、大きく溜息をつき、クレリックの元に向かう。

足を一步踏み出したとき、ふと、アルは腰に違和感を感じた。一旦

足を止め、腰辺りを手で探ってみると、弾かれるように、細長い、これまた黄色い毛に覆われた尻尾が、白衣の下から出てきた。

どうやら、生えてきたとき、ズボンから出ずに、シャツとの隙間で引っ掛かってしまっていたらしい。

恐らく、その丁度引っ掛かっている部分を手が触れてしまったのだろう。

アルは何事もなかったかのように、再び歩き出す。クレリックの元へ辿り着くと、彼の顔に右手をかざした。

「リカバ……」

術名を言い終わるときだった。突然目の前に全身黒づくめの者が現れ、アルに向けて術を放った。

瞬景であるうその人物の手から、黄色い閃光が飛び出す。

アルは瞬時に後ろへ飛びのくと、応戦のため、術を放った。

「デیفエンド！」

彼のかざした右手から青い六角形の盾が飛び出す。勢いよく飛んで

きた瞬景の術は、あっさりと跳ね返り、真っ直ぐ瞬景の方へと飛んでいく。

「！ 危なっ」

瞬景は、甲高い悲鳴のような声を上げ、咄嗟にその場に伏せた。

声の高さから、女性だとアルは直感し、出来るだけ威力の弱い術を放つ。

「スタティック・エレクトリ」

アルの右手から、白い閃光が飛び出す。

あっという間に、それは瞬景の女性に直撃し、女性はうつ伏せに倒れた。

「あれ？ 結構弱く放ったつもりだったんだけど……」

アルはそう呟くと、クレリックを助け起こす。

先程使おうとしていた術を使うと、クレリックは勢いよく起き上がった。

「いやいやいや、実に凄い！ まるで夢を見ているようだったよ！
！ なんと美しい光だった。あれは特殊な魔術を使ったね？」

起き上がるなり、大きな声で話しまくるクレリック。アルは耳を押さえながら、適当に頷いた。

「はい、はい。ありがとうございます、ええ」

次々と飛ばされてくる言葉に、アルは心底参っていた。

猫になったおかげで聴力が発達している彼にとって、今のクレリックの賞賛の嵐は、うるさくて仕方がないのだ。

しかし、クレリックの声を含む全ての音は、すぐに消え去った。

クレリックが呆然とした顔で此方を見つめている。

クレリックの顔が、遠くなっていく。

暗闇の中に落ちたとき、アルは初めて自分が敵の攻撃を受けたことに気づいた。

敵の攻撃を受け、自身は吹っ飛び、ダストシユートの中に偶然入っ

た、と。

……難を逃れたアルは、なんとなく視線を下に移す。

胸ポケットの布が深く切れ、中から透明な液体が溢れ出ている。

それを見て、長い年月を掛けて作り出した薬が、自分を守って犠牲になった事をアルは悟った。

透明なガラスと液体が、一気に闇の中へと消えていく。

アルは、耐え難い喪失感で眉を顰めた。

結局、薬を守ることが出来なかった。口をきつく結び、目の奥から出てこようとすることを抑える。

「うっ……ぎゃっ！」

不意に背中に強い痛みを感じて、遂にアルは堪えていた涙を流してしまった。

涙で視界が滲む。辛うじて草が見えたので、アルは外に出たのだろ
う、と確信する。

アルは、濡れた目を手で拭くと、空が先程とは一変、曇り空になっていることに気づいた。

いつ雨が降ってもおかしくないほどの空。アルは、急いで立ち上がると、真っ直ぐ前に走り始めた。

賭けのようなものだが、するに越したことはない。逆に言えば、それしか方法がないのだ。

アルは、誰かに協力してもらいたかったのだ。一人では背負い切れない。誰か協力者が必要だった。

研究所のボスを止めるために。

「はぁッ……はぁッ」

アルは、息を切らしながら、長い草地を走り抜けていった。

#0 逃走（後書き）

今回は、普通の小説では約23ページの内容でした。

#1 狼少年（仮タイトル）

今回は、「蒼の狼」を読んで頂き、誠にありがとうございます。

第一章は、現在執筆中のため、公開しておりません。

お気長にお待ち下さい。

また、第0章の更新（修正）が遅れてしまい、大変申し訳ありません。

次回からは改善：したいところですが、小説は毎回修正をして

書いていっているのです、どうしてもペースが遅くなりがちなので、改善は

出来なさそうです。

…では、第0章、1章共々、よろしく願います。

楽しんでいただけたら幸いです。

瑠亜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3323w/>

蒼の狼【タイトル未定】

2011年12月8日01時00分発行